

兵学校の俊才らと交遊

亡き兄の畏友が恩師に

明治維新によって、徳川家は、静岡藩70万石に封じられた。家臣の生活は苦しかった。伊庭想太郎も養父秀俊らとともに、いったん静岡に、すぐ横須賀に移り住んだ。

そこへ、亡き八郎の畏友だった旧幕臣中根淑が訪ねてきた。戊辰戦争のとき、中根は品川脱走の美加保丸では八郎と同行したが、その後江戸に留まり、維新後は沼津に住んでいた。

明治4年(1871)夏、想太郎20歳である。

「想太郎は今どうして居るかと訪ねましたら…」と、後に中根はそのときのことを『伊庭ものがたり』と題した文章に残している。

当時、想太郎は、ある漢学者の塾で学んでいたのだが、中根は忠告した。「それでは、これから後、役に立つ人間にはなれない。今日は今日の学問をしなくてはならぬ」

文武両道の中根は当時、沼津兵学校の教授を務めていた。後に陸軍参謀局に出仕、『兵要日本地理小誌』の編纂で知られる。想太郎にとって、中根は終生の恩師となる。

逆境で重視した子弟教育

ここで、沼津兵学校について少し触れたい。明治2年、沼津城跡に開設された兵学校の教育思想



▲沼津兵学校の門（沼津市の明治史料館前）



◀沼津兵学校址（現、城岡神社境内）

に、やがて榎本武揚が開設する私立育英黌の原点を見るからである。静岡藩は逆境にあつて、いや、そうだからこそ、まず子弟教育を重視した。

兵学校の教授陣には、旧幕府のそうそうたる人材をそろえた。初代教頭は西周である。幕末、榎本武揚とともにオランダに留学、国際法などを身につけた啓蒙学者だ。やはりオランダ留学仲間である後の海軍中将赤松則良、陸軍の砲術家永持明德らも教授として名を連ねた。永持は、後に榎本が創設した私立育英黌の初代黌長（校長）を務めている。

教科は英語、フランス語のどちらかを必修とし、万国地理、歴史、物理、数学など広範に及んだ。生徒には若者約300人が選抜され、多くの人材を輩出した。

さて、想太郎に話を戻す。

中根の懇切な助言で、想太郎は中根の家塾に身を寄せ、万国史、究理学（物理学）を学んだ。沼津兵学校に通うことはなかったが、同年輩で俊才ぞろいの生徒たちとはしばしば交遊しただろう。

そこに、後に言論界で名を成す島田三郎がいたことは記憶しておこう。後年、政治家星亨を「醜魁」と呼んで、激しい筆誅を加えた人物だからだ。また、兵学校併設の小学校卒業生には、渡瀬寅次郎の名もある。札幌農学校に進んだ渡瀬は、後に想太郎が校長を務めた東京農学校でも教鞭を振るっている。

明治5年、新政府の要請によって、沼津兵学校は廃止された。多くの教授が次々引き抜かれて、新政府に登用された。しばらく後、やはり上京する中根に、想太郎も従った。

想太郎の沼津時代は、2、3年だったとみられる。決して長くはないが、新たな学問と人脈に出会ったという意味で、まことに貴重な青春だった。

渡瀬寅次郎（1859-1926）



幕臣の子。沼津兵学校附属小学校、東京英語学校、札幌農学校に学ぶ。東京農学校教師、茨城県立師範学校校長、東京農学校評議員、商議員。東京学院院長。近代農業啓蒙家。